

Jean-Claude DA FANTI ジャン＝クロード・ダ・ファンティ

1946年にエリクール (Héricourt) に生まれたジャン＝クロード・ダ・ファンティことファンティナティ (Fantinati) は幼い頃から絵画に激しい情熱を持ち続けています。イタリアのヴェネト (Veneto) 地方出身の母親にルネサンスのイタリア美術の手ほどきを受け、その古典の影響は彼の抽象的な美学にはほとんど見られませんが、彼の構成、画面上のバランスの追及そして繊細な線と、作品の多くを成している二部作、三部作の制作動機を裏付けるものといえます。

彼の絵画の特徴となっている抽象化は、マチエール(素材)、色、動きを結びつけてときにキネティックアートに近づきます。シニフィアン(記号表現)、シニフィエ(記号内容)と支持体は、シャーマン的とは言えませんが、非常に肉体的でほとんど蝕知的な瞑想、芸術体験の中で融合するのです。流动し、はっきりと意図して遠ざかっていく線は極端なほどで、一様な色合いの不規則なレリーフのきめの粗さに表れるのです。ダ・ファンティはこのような理由で自身の絵画を「彫刻」と比べるのを好みます。彫刻とは「形、動き、色の調和の獲得にまさに執着することである」と彼は言います。

この美的融合において素材の選択は特に重要です。使われている顔料は自然のもので土や砂でできていますが、回収した部品、とりわけ自動車産業のプラスチック廃棄物を合わせてています。この再利用を物語る跡はさりげないと同時に喜ばしく、元の自動車のナンバープレートがそのまま作品のタイトルとなり、リサイクルされた様々な要素をあらかじめ示しているのです。

ジャン＝クロード・ダ・ファンティの抽象化は曖昧さとはかなさが、強迫的な綿密さや彼の下絵の厳密さとコントラストを形成するのです。そこには何かわからない夢のような、輪郭の中で漂う甘美な緩やかさがあり、自ずと湧いたもの、用意周到でない印象を与え彼の精確な構成さえも包み込んでしまいます。

したがって構造と解体の間での緊張はドラマチックなほどです。流れと移行の生み出す入念な「無造作」は単色塗りとレリーフによる明瞭な角ばった外観と対照をなしていて、ジャン＝クロード・ダ・ファンティ自身、「構築したデコンポジション（分解）」のアーティストの一人であると定義してくれるでしょう。

東京での初の展覧会にあたって、アルトピアルはジャン＝クロード・ダ・ファンティのきらめく色彩の混交的な、抽象であると同時に古典主義を取り入れた作品をご紹介できますことを誇りに感じます。彼の特色となっている構築された無秩序は『セ・ラ・ヴィ！』という表現の裏に隠された幸運のカオスを見事に実現しています。

